関西自然保護機構会報17(1)：65－66，1995

月　の　兎

京都大学大学院人間・環境学研究科　岡　田　美恵子

UNDER THE SILVERY MOONLIGHT

Mieko OKADA　*Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University.*

1994年10月14－16日の三日間，所属講座の講義の実地編として「ツキヨタケ鑑賞会」と銘打った京都大学芦生演習林での実習に参加することができた。宿泊した長治谷（ちょうじだに）作業所では，夕食時に自家発電装置を利用したほかは，ロウソクの下での生活だった。そんな中，自然が与えてくれる忘れがたい光に，私たちは触れることができた。

14日の夜，この会の主役であるツキヨタケを見に出かけた。この会は今年で3回目ということだったが，花見の流儀でいえばこれほど見頃のものは今回が初めてだったそうだ。一抱え以上もあるブナの立ち枯れた幹に，びっしりと張り付いたツキヨタケはそれだけで見応えがあった。図鑑などで見るツキヨタケの発光の写真は，長時間の露出で得られるものであり，実際とは随分異なるという。私たちが実際に見たその光は，私たちの生活に利用する光に比べるとか細いものであった。手のひら大のツキヨタケ一つでは，暗闇の中で新聞の見出しの文字を一文字づつやっと見ることができる程度なのである。しかも，この夜は月夜だったので，月が視野に入っているとツキヨタケの光がかき消されてしまう，それでも樹の幹に月を隠すと，ツキヨタケは，くっきりときのこの形を浮かび上がらせた。ツキヨタケは，ひだの部分が光るのだが，倒木に発生しているツキヨタケもかさを透して光を放っている。林床まで届く月光が，枯れ葉を照らし，ツキヨタケと見紛うばかりであり，私たちはふんわりとした落ち葉に座りこみ，言葉もなくこの光景を見つめた。懐中電灯をつけると一瞬にして消えてしまう光の饗宴だったが，この宴に，控えめな参加者がもう一人いることに私たちは気づいた。落ち葉の中でビーズ玉ほどの光を放っていたのは，一匹の陸生ホタルの幼虫だった。この森にどれだけの生き物が光を放っているのだろうか。そう思うと，しんとした森がふいに，にぎやかになった。

翌15日の夜は川に出かけたが，懐中電灯を消して歩く山道は，江戸後期の歌人・良寛（吉野，1993）の

月よみの光を待ちてかえりませ山路は栗の
いがの多きに

という短歌の情景そのままであった。季節はまさにクリの実りの時期で，足元や樹の切り株の上にもクリのイガが目についた。しかし，不思議とクリの実は目につかない。昼間にクリの木の下を皆で探したが片手一杯の実を拾うのがやっとだった。クリの実は生でも淡い甘さで，ヒメネズミなど森の生き物たちにとって人間になどゆずれないご馳走なのであろう。月も足元を照らすに充分な月齢があり，私たちは月影を引いて歩き，川の中に魚影を探した。私は光に満ちた秋の森を存分に楽し

んでいた。しかし，これらの光が心の奥に沈む澱を，浮かび上がらせもするのである。

山のクリは毎年実り，月は満ち欠けを繰り返す。このような自然の循環は変わらずにあるのだが，私たちはそれを見つめることを遠ざける状況に身を置いているとも言えよう。そのことが私たちを，人間のサイズでのみ物事をはかる世界に閉じこめてしまうのではないだろうか。夜空の星すら，見つけにくい都会に暮らす中で，光と闇に対する感覚が鈍くなっていることに気づかされた。私たちは，真夜中ですら暗闇に接することはない。モンゴメリの小説（中村訳，1962）の中で老いた燈台守が，「すっぽり闇につつまれたときは，闇が味方なんだ。ところが提灯なんか持って，闇を遠ざけようとする……。自分だけ闇から離れようとする……すると闇が敵になってしまう。」と話す場面がある。芦生の夜は，子供の頃に読んだ物語の世界を現実に引き寄せてくれた。そして，先人が培ってきた自然感を引き継ぐに必要な，自然に対する感受性を失いつつあることに対する大きな危機感を抱かせた。

さきに良寛の歌を引用したが，彼の歌の魅力は日常性にあると言われる。良寛にとって自然は自らを優しくも，きびしくも包み込む日常生活そのものであったろう。しかし，私たちは先人と同じ状況にはすでにない。この歌にしても，友への心遣いはともかく，月が上るまで今少しいてくださいという時間の感覚までを汲み取ることができるか不安である。良寛の自然に対する思想は，

形見とて何かのこさむ春は花やまほととぎす
秋はもみぢ葉

に現れている（吉野，1993）。この歌に大きな影響を与えている道元の

春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえてすずしかりけり

（吉野，1993）とをあわせ，これらの歌に共通する内容は，日本人の自然感を端的に表すものなのだろう。しかし，現在の日本人が，この歌を引用して自然随順を示めしたとしても，その内容は，これらの歌の本質を伴わない希薄なものにならざるをえない危険をはらむことを，どれだけの人が自覚しているだろうか。生物の世界が，複雑なかかわり合いによって織りなす美しさの中に，良寛は違和感なく包み込まれていたはずである。私たちは現在に生きる以上，その輪から人がはずれつつあることを，自然の美しさに驚嘆しつつ自覚しなければならない。

それでもなお，自然に思いを寄せる人には共通の思いが存在する。レイチェル・カーソン（上遠訳，1991）は，著書の中で次のように述べている。

「鳥の渡り，潮の満ち干，春を待つ固いつぼみのなかには，それ自体の美しさと同時に，象徴的な美と神秘がかくされています。自然がくりかえすリフレインー夜の次に朝がきて，冬が去れば春になるという確かさーのなかには，かぎりなくわたしたちをいやしてくれるなにかがあるのです」。

芦生での最後の夜，私たちは流れ星を探し，昴を数え，翻って山に沈みつつある月を見た。空が澄み，地上の灯がないということは，これほど月の陰影をはっきりとさせるのだろうか。真夜中の月は，兎が餅をつく姿を，逆さまにくっきりと蒼く刻んでいた。

引用文献

カーソン，R.L. 1956（上遠恵子訳，1991）．センス・オブ・ワンダー．63pp. 祐学社，東京.

モンゴメリ，L.（中村佐喜子訳，1962）．アンの夢の家．295pp. 角川文庫，東京.

吉野秀雄．1993．良寛　歌と生涯．409pp. ちくま文芸文庫，東京.